

「比べる」ことでせまる音楽の魅力

～表現を「比べる」ことで新たな自分に気付く～

居澤 結美

「比べる」ことでせまる音楽の魅力というテーマで、5つの研究方法を考え実践を進めていった。楽曲そのものをどのように「比べて」いくか、その単元構成（表現と鑑賞の組み合わせ）をどのように工夫していくか、また「比べて」いくための環境づくりはどうするのかなどである。

本実践で上記のことを行う中で、子どもたちは様々な視点から「比べる」ことができ、動作、言語、絵を用いるなど多様な表現ができると感じた。しかし、それだけでは「音楽の魅力」に気付いていることにはならない。その多様な視点・表現をどうしていくかがこれからの課題である。子どもたち同士、また教師の声かけによってこれらが一般化されていくことで音楽を聴く視点、音楽的要素などを身に付けていけるのではないかと考える。

この課題を来年度からの研究の視点として設定し、進めていくことが必要であると考えている。

キーワード：ハンガリー舞曲第5番、音楽科、比べる、鑑賞、聴き方

1. 研究の目的

1. 1. 豊かに感じ取れる理由をさぐる

子どもたちは歌うことがとても好きである。高学年になると少し「恥ずかしい」という思いが出始め、歌うという表現活動に消極的になってしまうことが多いと感じる。しかし子どもたちは1年生から4年生までの積み上げがあるからこそ、歌うなどの表現活動に抵抗はなく、高音であってもとても美しく歌うことができる。例えば「となりのトトロ」を歌うときに「低学年の声」と言うと、とてもかわいらしく歌い、「高学年の声」と言うと、響きのきれいな声を出して楽しそうに歌うのである。これは自分たちで「美しい歌声」を理解し、またそれを出す方法を用いることができるからである。また、音楽をかけると自然とリズムをとったり、豊かに音楽を感じ取ったりすることができる。

例えば5年生歌唱教材『それは地球』の授業では「どのようなイメージでしたか」と問いかけると「運動会で行進の時に流れてきそう」、「はじめはリズムがよくってなんかのりのいい感じ」、「3・4段目は音が重なってきれいに聴こえる」など意見がたくさん出てきた。しかし「どうしてそう思ったのですか」「どこからそう感じるのですか」ときくと、答えに詰まってしまう。ピアノを習っている子からは「だってここはのばす音やん（音符について）」などと答えがかえってくるが、多くの子がすぐにはその理由が落ちてこない。

子どもたちは豊かに感じ取るがそれに理由があることに気付いていないことが多いと考える。

だからこそ自分たちの感じていることは音楽を形づくっている要素がかかわり合い、生まれてくるということを知り、その感覚を身に付けてほしいと考える。

そのために「比べる」ことを用いて、自分たちの感

じ取っている要素は一体何であるかを考えていくことを通して、理解を深めていく。合わせて「学びをデザインする子どもたち」とはこのような理解したことをこれからの学習で用いて主体的に取り組んでいけることをめざしていく。

1. 2. 新たな自分の気づきを生み出す

今までの自分が感じたこと・気付いたことや友だちの感じたこと・気付いたことをワークシートや板書、掲示物などの可視化されたものやビデオ・ICレコーダーなどの音などを用いて振り返ったり、今の自分のそれらと比べたりすることで新たな自分が生まれると考える。その新たな自分を知ることは、次への学習の手立てとしてつながり、学びを深めていくことになる。

2. 研究の方法

2. 1. 曲想の移り変わりを感じ取りながら聴く

楽曲全体を通して聴き、感じたことを出し合い、それぞれの旋律の特徴について気付いたことを発表し合うことで曲想の移り変わりを味わう。またワークシートを用いて、その感じたことと旋律の特徴のかかわり合いを考えることで「聴いて楽しい」の理由を知ることができる。子どもたちは感覚的だったことに理由をもち曲想の変化を感じ取ることとさらに鑑賞や表現活動に興味・関心をもつことができると考えている。

2. 2. 工夫して表現することで感じ取る

第2次で行うリズムアンサンブルでは、リズムや拍の流れ、音の組み合わせを学習することはもちろ

んであるが、主張点をめざすために前時で得た強弱の変化、速さなどを用いて曲想の変化を生み出すためにはどのような工夫をすればよいのかという活動を重視していく。

2. 3. 「聴いて楽しい」と感じる背景には音楽を形づくっている要素のかかわり合いを感じ取ることができる

指揮者、オーケストラによる楽器などの違いから、今までの「ハンガリー舞曲 第5番」とは曲想の移り変わり、旋律の特徴の異なる「ハンガリー舞曲 第5番」ト短調（ブラームス/パーロウ編）サイトウ・キネン・オーケストラ」楽曲を聴き比べることで、これまで学習してきたことがより鮮明に意識付けられていくことを願う。

2. 4. 鑑賞と表現を組み合わせる

《「比べる」ことでせまる音楽の魅力～思いや意図をもって表現できる子どもに～》（音楽科教科提案）から、旋律の特徴に気付くために、旋律の繰り返しや変化、速さや強さなどこの音楽を形づくっている要素を少し変えてみたものと比べ、考えていく。

本実践では第1時の鑑賞から第2、3時の実際に表現するリズムアンサンブルを経て、第4時でもう一度同じ楽曲の鑑賞を行う。第1時と表現活動後の第4時の自分の思いや感じ方を比べることを通して、より深く音楽を形づくっている要素のかかわり合いを感じ取り、楽曲の構造を理解できると考える。このことから曲想の変化をとらえて鑑賞する能力がさらに高まり、またの鑑賞への興味・関心が育まれることを願う。

2. 5. 細やかなみとりを行う

聴き合い、学び合う学級風土を作ったり、音楽を集中して聴くために課題の工夫をしたり、視覚的に楽曲をとらえることができるようにICT機器などを用いたり「比べる」ための環境づくりをしてしていく。

また音楽の表現活動のみとりはとても大切である。主には子ども同士がかかわり合う中で伝え合ったり、発表したりしている様子を記録していく。そして子どもたちが感じ取った中で出された表現（文章・身振り手振りなど）を音楽の表現（指導事項）に変換していく必要がある。しかしより細やかなみとりができるようにワークシートはもちろんのことビデオやICレコーダーを使って子どもたちのつぶやきや活動の様子を記録し、個々にあった支援ができるようにしていくと考えた。

これら5つのことを進めていくことで子どもたちは豊かに感じ取れる理由をさぐり、自分自身の表現を「比べる」ことで新たな自分に気付いていけると考えた。

3. 単元（学習活動）の実際

3. 1. 題材設定の理由

「ハンガリー舞曲 第5番」（ブラームス作曲/シュメリング編曲 教育芸術社 鑑賞用CD）を聴くと子どもたちは思わず口ずさんだり、鼻歌にしたりすることだろう。きっとそれに合わせて体を動かしたり、指揮者のまねをしたりする子どもも出てくるだろう。この楽曲は、なんだか「聴いて感じる」よさや面白さがある。それは、旋律の繰り返しや変化を捉えやすく、速度や強弱、調性の変化それらに伴う曲想の移り変わりなど音楽を形づくっている要素がかかわり合っているからである。このことから、子どもたちは曲想の変化を感じ取りやすい楽曲である。また、演奏するオーケストラや指揮者によっても解釈が異なるため、聴き比べることによって、曲想の変化に対する興味・関心を高めることができる。

鑑賞後のリズムアンサンブルでは、強弱やその変化や、リズムパートの組み合わせ方による音の重なりを工夫することや、鑑賞で感じ取ったことを関連付けることで、曲想の変化を豊かに表現できると考える。

本題材「ハンガリー舞曲 第5番」の鑑賞とリズムアンサンブルの表現活動を通して、自分たちの感じていることは音楽を形づくっている要素がかかわり合い、生まれてくるということを知り、その感覚を身に付けてほしいと考える。そのために「比べる」ことを用いて、自分たちの感じ取っている要素は一体何であるかを考えていくことを通して、理解を深めていく。合わせて「学びをデザインする子どもたち」とはこのような理解したことをこれからの学習で用いて主体的に取り組んでいけることをめざしていく。

3. 2. 授業の実際

3. 2. 1. 演奏の異なる1種類目の鑑賞

「ハンガリー舞曲 第5番」（ブラームス作曲/シュメリング編曲 教育芸術社 鑑賞用CD）を聴いた。子どもたちは「なんか聴いたことあるかも」、「初めて聴いた」とそれぞれ感想をもったようだった。聴いていると、体を揺らしたり、指揮者のように手を振ったり、フンフンと鼻歌まじりにリズムをとったりとこの楽曲に引き込まれている姿が見られた。

全体を聴いてからの初発の感想は、

- ・3つ？4つ？5つかも…に分かれているようだった。
- ・おいかけっこしているみたいだった。
- ・速くなったり、遅くなったりしているところがあった。・何かに追いかけてられているみたいと感じた。
- ・波みたいにおしたり、ひいたりしていた。
- ・運動会で流れてきそう。

このあと、ワークシートのように旋律を分け、視点を与えてから再度聴いた。そうすると、繰り返しや強弱など初めの感想より様々なことに気付いていた。何度も聴きたいという子が多く、リズムにのって体を動かしたり、強弱に合わせて背筋を伸び縮ませたり、口ずさんだりとどんとと楽曲に引き込まれているようだった。気付いたことを発表する中で波みたいにおしたり、ひいたりしているところに対して、

はる：エのところが波みたいやね。(さらに旋律を見て)
なつ：< (クレッシェンド) があるから、波みたいに聴こえるのかな。
教師：じゃあ、もう一回聴いてみる？
みんな：聴く！
なつ：やっぱり！<が付いてるから、波みたいに聴こえるんや。
あき：ウについてるくも何か関係あるのかな。
教師：そしたら、見て聴いていきましょう。
と広がっていった。



図1 ハンガリー舞曲第5番（教育芸術社）



図2 曲を聴き比べ、ワークシートに書く

強弱や記号などに気付いていった。それから、旋律のヒミツワークシートを使い、旋律アを比べた。子どもたちからは、

- ・付点がついているとリズムにのっているが、ついていないとリズムにのっていない感じがする。
- ・付点がついていないと、重い感じがする。
- ・付点がついていると、速い感じがするけど、ないとゆっくりな感じがする。

などの意見が出された。旋律イについても、同じような意見が出された。

3. 2. 2. リズムアンサンブル（表現）

鑑賞後、リズムアンサンブルの活動に入った。「小学生の音楽5 平成23年度～音楽授業支援DVD (教育芸術社)」を使い、3つのパートのリズムを手拍子で打つ練習をした。DVDはこれから何をするかがよくわかり、子どもたちはとても意欲的にリズムアンサンブルに取り組めるようになった。どのリズムもほぼ全員がたたけていて、少し苦手意識をもっている子に対して声をかけ、いっしょに合わせて行う姿も見られた。

授業の終わりには、全員が3つのパートの手拍子が打てるようになっていた。それから、グループの中で3つのパートのそれぞれを決め、練習を行っていた。そのときは「簡単！簡単！」とこにこしていたが、3つを合わせると、つられてしまいリズムがうまく合わせられず苦戦していた。けれど、つられそうな子を真ん中にしたり、メトロノームに近づき聞きながら打ったりするなど、どのグループも工夫して行っていた。

そして、グループ発表ではどの班もとてもうまくたたけていた。しかしどの班も強弱をしっかりとつけてたたいているつもりなのだが、思った以上に手拍子では強弱が分かりづらく、「とても難しい」というていた。そのため強弱の分かりやすい打楽器を使うことを知らせると喜んでいった。

3. 2. 3. 演奏の異なる2種類目の鑑賞

今度の鑑賞曲は「ハンガリー舞曲 第5番 ト短調 (ブラームス/パーロウ編) サイトウ・キネン・オーケストラ」を聴いた。1曲目より、オーケストラも指揮者が違い、聴こえてくる感じは大きく異なると考え、子どもたちが聴き比べるにはとてもよいと考えた。はじめに以前聴いた曲を流し、ワークシートを再度読んだ。そして、もう1曲を聴いた。こちらからは「この曲を聴いて、感じたこと・気付いたことを書きましょう」と発問し、「この2つの演奏を比べましょう」とは投げかけないようにした。

子どもたちの反応は、「あれ、あれ？」と驚いている子が多く、「あれ、いっしょの曲や」と言う子から「けど、なんか違うかな…」と聴き入っていた。

この曲についての感じたことなどを書き、発表していった。多くの子が、すでに2種類の演奏を「比べて」聴いており、ワークシートはその記述がほとんどであった。これは、身体表現と絵、言葉で気付いたこと・感じたことを伝えている場面である。

教師：感じたこと・気付いたことを発表できる人。

ふゆ：全体のことで前のより、ゆっくり。

そら：1回目と2回目で速さが違う。

くう：ゆっくりでだんだん速くなった。

まなつ：1回目の方が速い。

まふゆ：エのことなんだけど、1回目よりゆっくりやけど速い。書いてるんやけど。

教師：もうみんな前で「比べて」聴いてるんやね。
 まふゆくんどうぞ。続けて言ってよ。
 まふゆ：けど先生、なんて言っているか…。うまいこと言葉で言えないかも。
 教師：どうする。
 まふゆ：こう（手で波のようなしぐさを行う）…、これなら描いてるんやけど。
 教師：それなら書いてみて。（前に書きにくる）
 まふゆ：なんかこんなゆっくり波みたいになってそれから、こう短い速い感じがな。（下記図2を書く）
 教師：これなんか分かる？
 みんな：うん、感じは分かるかな。
 教師：あきこさんは前のどう感じてた？
 あきこ：波みたいな感じで。
 教師：そしたら今聴いたのは。
 あきこ：波みたいだけど、もっとゆっくりかな。

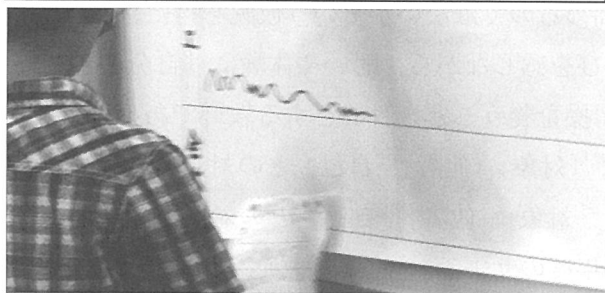


図3 感じたことを表している場面

4. 単元の考察（3に対する考察の言葉）

子どもたちは2種類の演奏を「走っているよう、おどっているみたい」など豊かな言葉で表現したり、自分の感じたことを言葉には表しにくくても絵に表したり、身体表現したり、とたくさんの感じたことを書くことができていた。しかしその表現されたものを教師がどれもつなげられず、「どうしてそのように感じたのか」という理由付けがなされないため、クラス全体の共通理解ができないままどんどん授業が進んでいった。さらに「ゆっくり」「速い」などの気付いたことも個々に異なるため「私はそこまで速いと感じていないのにな」と思っている子がいた。さらに「比べて」と伝えないことで、すでに「比べて」聴いている子と友だちの意見を聴いてから「比べて」出した子の感じ方の違いも大きかった。その違いを埋めるため「もう一度聴きたい」という子が多く、時間的余裕もなかった。

教師は2種類の異なる演奏を聴いて、子どもたちは「全然違う!」と驚くだろうと考えたからこそ、これを選んだ。しかし子どもたちの反応は「ちがう」と感じた子もいれば、「あんまり変わらない」、「ほとんどいっしょ」、「いっしょのところが多いけど、ちがうところもあるし」と教師のもつ“ねらい”と大きくちがうこともたくさん出た。それは教師の教材研究の浅さもあるが、それ以上に、どの部分を「比べて」聴くのかと視点がなく曲を聴いたため、「比べて」ことができな

かった。合わせて視覚化をして整理していくべき板書が子どもたちの思考に沿っていないため新しい自分に気付くこともできなかった。自分の気付きと前の自分の気付き、クラスの子の気付きなど様々な思考をつなげるための板書の工夫が必要であり、情報の共有や可視化をしていく必要があった。

5. 成果と課題

成果としては「比べる」視点をはっきりと示さないことで、子どもたちは様々な視点から「比べる」ことができていた。またその表現の仕方も、動作、言語、絵を用いるなど多様であった。

しかし、その多様さをどうしていくかが、これからの課題となる。もちろん教師は「何を学ばせたいのか」というねらいをもち、より深い教材研究を行い、「このねらいだからこそ、ここを比べてほしい」という思い・願いをもち、進めていくことに変わりはない。

だからこそ4の授業記録下線部の場面で、教師は「これなんか」ととても抽象的に全体に返さず、具体的に返していく必要がある。教師が抽象的であるため子どもたちも「感じは分かるかな」と加えて、抽象的に答えている。これでは、同じことを言っていたとしても、表現が異なっていることやその逆で共通理解がしていけない。そこで全体で感じたことを挙げていく前段階としてグループ活動を取り入れてはと考えた。グループで話し合い共通理解することで、多様な表現と視点がより深まって全体に出てくることになる。そして、さらに全体場で、子どもたちの表現を教師が一般化していくことで音楽を聴く視点、音楽的要素などを身に付けていくことができるのではないかと考える。

最後に実践から「研究を進めていく中で、“音”を大切に作る空間を作り、“音”のある状態、ない状態のメリハリがとても必要だ（本研究協議会の参会者の方から）と大切なことを得ることができた。音楽研究を進めていく中で、音楽だけでなくすべての教科に通していることを学び、これからの実践に生かしていこうと考えた。来年度はその環境づくりも含め、その曲のもつ意図が感じられる視点を「比べて」いくことをテーマにして進めていきたいと考える。

参考文献

- ・文部科学省(2011)「小学校新学習指導要領解説」音楽科
- ・佐伯 胖(2010)「「学び」を問いつづけて
 ～授業改革の原点～」小学館
- ・金本 正武 坪能由紀子 [編著] (2009) 東洋館出版社
 「小学校新学習指導要領 ポイントと授業づくり音楽」
- ・文部科学省 国立教育政策研究所 (2011)
 「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための
 参考資料【小学校 音楽】」教育出版
- ・公益財団法人 音楽鑑賞振興財団 [編集] (2011)
 「体験してみよう! 実践してみよう!
 これからの鑑賞の授業」公益財団法人 音楽鑑賞振興財団